

神在月：神々のいる月

旧暦の10月には、日本全国から無数の神々が出雲に集まると言われています。神々は、一週間かけて、出雲大社の主祭神であるオオクニヌシノカミと一緒に、来年の収穫の成否や人々の関係を決めていきます。このため、この時期は国のほとんどで神のいない月（神無月）と呼ばれていますが、出雲では神のいる月（神在月）と呼ばれています。

出雲での年に一度の集まりの起源は、8世紀初頭に書かれた日本最古の（複数の）文書に記された物語に関係していますが、この文書にはさらに古い口伝が記録されていると考えられています。国譲り神話は、オオクニヌシが太陽の女神、アマテラスオオミカミの子孫に土地を譲る代わりに、立派な社殿と「見えない世界」を支配する権限を手に入れたことが記されています。この「見えない世界」とは、神々の領域だけでなく、人間の精神も含まれています。こうしてオオクニヌシは「縁結び」の神となり、出雲大社はオオクニヌシの主祭地となったのです。

神在月の間、訪問した神々は本殿の東西にある末社に納められます。神々は、出雲大社の西約1キロにある稲佐の浜の近くにある小さな社で毎日集まり、翌年の人間関係の運命を決定します。出雲大社と神々の国のまつりの展示室（中央ロビー左）には、この賑やかな集まりの様子を描いた木版の浮世絵が展示されています。19世紀に制作されたもので、中央にオオクニヌシが座っています。様々な神々が木の札に人の名前を書き、それを紐で結んでいる様子が描かれています。その後、ペアリングしたものをオオクニヌシに見せて承認を求め、オオクニヌシは各カップルの運命を確認します。